

回復期リハビリテーション病棟—新しいシステムと運営のしかた

堀尾 慎彌 (医療法人堀尾会熊本託麻台病院)

回復期リハビリテーション（以下、リハ）病棟の制度が2000年4月から立ち上がり、介護保険制度のスタートと同時期であることは意義深いことです。急性期リハから回復期リハ、そして維持期リハへの医療的リハの流れの中で、より集中的、専門的にリハ治療を実施し、その治療期間や対象疾患を特定したものが回復期リハ病棟です。平成15年8月末での病床区分の見直しとしての第4次医療法改正の期限までに、回復期リハ病棟の設置は思ったより以上に増加し、336病院の約18,000床に上っています。

このような環境の中でこれからのリハシステムと運営の仕方を中心とした本書は、最も時宜を得たものであります。それは、これから回復期リハ病棟を始めようと考えている病院や、最近回復期リハ病棟を立ち上げて運営しはじめた病院関係者などの方々のために、先進的に回復期リハ病棟を運営している方々が中心に、その実際を具体的に提示していただいているからだと考えられるからです。

また、リハの評価においても、従来の実施時間を中心としたものから、患者の症状に応じた個別療法を中心とすること、病棟におけるADLの自立を目

的としたリハの評価の充実やスタッフの病棟配置による可能なADLから、実施しているADLへの早期からの集中的実践など、回復期リハ病棟の運営上やシステム上に各施設の努力とご苦労が偲ばれ、これから回復期リハを検討されたり、スタートした施設には大いに参考となるものと思い、スタッフ関係者は必ず読んでいただきたい。

また、急性期病院から回復期リハへ、そして慢性期リハ（維持期リハ）へとそれぞれの時期における十分満足できる診療を提供できる態勢は、なお地域でのリハ・サービス提供体制に著しい地域差があり、その本来の実現にはなお不十分であり、在宅リハ医療までも視野に入れての治療計画など、今後の大きな課題についても提言されています。個別性や個性を的確に把握したうえで、適時適切なリハ・ネットワーク機能の構築が強く望まれます。

21世紀のリハのあり方を考えていくうえでも、十分一読に値する書であり、回復期リハ病棟の関係者のみならず、他科の診療スタッフにも是非お勧めしたい書です。

(B5判 頁182 2,500円＋税 2003 三輪書店発売)